

移住するコツ されるコツ 者に聞く

時間をかけて
心の距離をつめていく

元都会暮らしで、元デザイナーの藤田さん。移住のきっかけは子育てだったそうです。子どもが1歳になったとき「自然の中のびのび育てたい」そんな思いで飛び込んだ物部でのやまぐらし。最初は（やはり）苦勞の連続でした。「土地も風土も知らないし、農業したいという思いはあっても知識も経験も乏しい。あと、何より人付き合い。奈良の人間とは正反対」と、

いまでこそ笑いながらですが、当時の苦勞を話してくれました。「奈良の人間は本音を隠して配慮するといつか、裏表を使い分ける。高知の人はとにかくストレートですよね。思ったことをズバツと言おうし、正直最初は圧倒されました」それでも徐々に地域になじみ、集落の人たちとの絆は、いまでは家族のように深くなりました。

この生活は、都会の人があこがれる新しいライフスタイルです。



地域移住サポーター
手づくり石けん 西熊家
藤田 希民子さん

CASE 1 ものべの大西でやまぐらし

お年寄りたちに寄り添い、知恵を借り
私たちがこの集落をつないでゆく

都会ではできない
暮らしをしています

数年前に始めたブログがきっかけで、田舎暮らしにあこがれる人たちから移住の相談を受けるようになった。「デザイナーや有機農家など、多様な人たちが移住してきた。いまでは大西集落の主力は30代の若者です」もちろん一朝一夕でできることではありません。藤田さんら先駆者が、地域に根ざし、地元民たちと助け合いながら生活してきたからこそ、移住者を受け入れる大西集落の懐の深さが培われたのだと思います。「地元のお年寄りや移住してきた私たち。車の両輪の

ように一致団結して、この先も集落を磨いていきたい。お年寄りは知恵と経験、移住者はエネルギーと活気を担当。地域の担い手として、バトンを受ける覚悟です」大西以外の集落では、「わざわざ都会からこんな山奥へ引っ越してくるなんて、移住者って何者？」といまでも懐疑の目を向けられることもあるそうです。「私たちは自分たちのアイディアで自立し、新しい価値観で生活している。田舎暮らしは、都会の人たちがあこがれる、いま注目の生き方だということを知ってほしいですね」



シカやイノシシの脂を原料にした天然素材の手づくり石けん。

望むライフスタイルを
しっかり描いて

愛媛県出身の近藤さん。工科大学入学のため、当然の流れで香美市に引っ越し、当初移住者だという感覚はなかったそうです。

卒業後県内で就職し、市外にしばらく住んだ後、仕事をきっかけに土佐山田に戻ってきました。いま住んでいる船谷は、のどかな環境にありながら自動車を使えば町までもすぐ。「バランスがちょうど良く暮らしやすい。子育てにもいい環境」と、船谷の魅力を話してくれました。「香美市は山も里も町もある。いろんな移住者の二

おおらかであけっぴろげ。
そんな地域性が自分に合ってます。



地域移住サポーター
近藤 純次さん

高知工科大学への入学を期に、愛媛から高知に移住してはや15年目。現在、移住を軸にしたまちづくりを応援するNPO法人『いなかみ』の設立に向けて奔走中。

安心して移住できる
ネットワークづくり

現在設立準備中のNPO法人『いなかみ』で、地域と移住者を支える仕組み作りをしたいと語る近藤さん。「香美市にはいろんな伝統や面白い風習が残っている地域がたくさんある。そういうものを外側からの視点で発信しながら、残していく手伝いをしたい。そのためには受け継いでいく人が必要。移住希望者が安心して移住できるような土台とネットワークを作り、移住者と地域をつなげるような活動ができれば」と、目を輝かせました。

収穫した野菜を手に近所のおばあちゃんと農業談義。世代間交流中。

地域移住サポーターにご協力を！

移住を希望する方の身近な立場で、相談に乗ってくれる地域移住サポーターを募集しています。資格や年齢などの条件はありません。親身になって相談に乗ってくれる方を、市が推薦し、県が委嘱します。委嘱後に、具体的な対応などの研修会を予定しています。

◆お問い合わせ先

まちづくり推進課定住班 ☎ 53-1061
高知県移住促進課 ☎ 088-823-9755

やまだの船谷でさとぐらし

CASE 2

お金や便利さだけじゃない、
ゆったりとした幸せを感じています。

「移住したい」という思いを、移住者や地域の人たちから聞き取り、必要な活動ができれば」と、目を輝かせました。趣味はウォーキングとバドミントン、そして野菜作り。ご近所さんとのコミュニケーションも、徐々に進行中です。



後編18~21P
に続く